

市指定有形文化財「金小札段威二枚胴具足」

日本風俗史学会 會員
前青梅市文化財保護審議会会長

齋藤 愼

武蔵御嶽神社は、平安時代の晩期、鎌倉時代中期、そして室町・江戸時代まで政權の中心となった武士階級の七百年間を反映した武具が神宝として伝承されています。さらに、古来より恒例の祭祀に、神器として供奉されるという、日本全国の神社の中でも稀少な存在です。平安晩期の赤糸・鎌倉中期の紫裾濃の二領の大鎧は有名ですが、今回は江戸前期の新しい形式の「当世具足」を紹介しましょう。

中世の一騎懸での騎馬戦用の「大鎧」に対して打物・集団・徒歩戦の「胴丸」から発達し、戦国時代の終わりに「当世具足」が定着します。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ

原合戦で、家康がほぼ全国の大名を掌握した、徳川三百年の幕藩体制の確立期に、「当世具足」も一定の形式を整えます。二〇年後の新体制づくりの仕上げ、大阪夏の陣の頃には、形状が確定していたと思われま

す。御嶽具足はそれらを欠失していますが、肩上に取り付けた孔が残っています。

四、胴の形状で当世具足の注目すべき点があります。胴の胸のあたりがふくらむように立挙、長側（幹）の径を、長側の一段目（御嶽具足は二段目）に向かつて増し、そして、そこから腰に向かつて小札を減らしてゆく。正面から見ると洋樽のような中フクラミです。御嶽具足の胴の前立拳の小札頭で数える上から33枚、33枚、34枚で、下に向かつて増え、長側一段目の小札は14枚、二段目14枚、三段目14枚、四段目14枚、五段目35枚となり、中フクラミです。腰まわりが締まるわけです。人体の運動機能発揮を考慮した構造です。この具足を真正面からよく見てください。中世の大鎧に無い当世具足の機能的な美しいかたちです。背中には背骨を考慮した背掬という微妙な縦方向のくぼみをつくりま

す。歴戦の古強者で、幕藩体制を確立した家康が元和元年（慶長二〇年・一六一五年）没して、直後、徳川御三家の筆頭、尾張徳川家に分与された遺愛の品に、その後の「当世具足」の定型式をすでにそなえた甲冑が現存しています。尾張徳川家所蔵の元和二年「駿府御分物御道具帳」に記録の、「御具足十六領」で、甲冑生産中心地の奈良甲冑師制作の標準的な当世具足です。この遺例を基準に、「金小札段威二枚胴具足」（以下御嶽具足）が当世具足の基本的構造と、調和のとれた装飾性も持つ甲冑である

を認めます。御嶽具足は横矧ぎ立胴です。そして、立挙、長側は一段ずつ増え、前立拳三段、後立拳四段、長側五段。従って、胴は丈長（高）くなり、肩は短めです。正面での胴丈は、35.7cm。肩は16.2cm。肩の表面は鉄板でかたく、胴部を吊り上げます。しかも首筋の防禦もかねて幅広く、ここに籠手の畏に重ねて袖も取り付ける籠手付の畏（責鞆）も出て、当世具足の肩上の典型です。御嶽具足も、クレーンのように胴を吊り下げる堅固さです。その上、肩の根もとの襟上、つけねが拡大した形です。小幡や満智羅、立襟などという首回りの防具が取り付けられるので、少し年代が降ったかたちです。首回りの防具は、亀甲形鉄を縫い付け、韋につんだ防具で、隙間の無い防禦をめざした当世具足構造を示しま

す。御嶽具足はそれらを欠失していますが、肩上に取り付けた孔が残っています。



八、当世具足の部分は、角はみな丸味があります。籠手と袖の冠板、草摺の菱縫板、鉄具廻りの輪郭、鞆一段目小さな兜の吹返しみんな角が丸っこい。「小丸」仕立てです。兜の鞆は、日根野鞆、饅頭とならんで当世具足に多い「当世鞆」ですが、その菱縫板は軽やかに曲面を作って外に反り出し、下緑の輪郭は、肩の袖の冠板の山形を受けて浅くなだらかに判り込む「肩摺り」という線です。美しい機能美です。類似の輪郭は、兜の鉢の正中板の下縁のうねりの曲線にもあります。なお、鉢の左右の腰巻板には鉄の角元を打ち（馬手側欠失）、角を左右に立てていたのです。面や眉庇の裏が朱色塗りである点は当世具足の特徴です。

てゆきます。そのきざしは、すでにこの具足の胸（立拳二段目）の左右の二つの菊座の鐙、弓手の「手拭付の鐙」と馬手の「采配付の鐙」（欠失）の付設にあらわれま

武州みたけ

仕立てで、弓なりに横に反りつけます。各段の裏面には、細長い鉄板を弓なりにして、搦みつけて、反りを固定します。足のさばきを考慮した点は、胴の胸部への考慮と同じです。そして胴に続く毛引糸である揺糸は長い。御嶽具足の場合9cmあります。中世の鎧や胴丸の揺糸は3cm程ですから随分長くなっています。胴を付けて、この揺糸の上から縹縮の緒（緒所は胴丸と同じ）を強く締めると、胴が押しあがり、肩が肩から浮き気味になり、鉄肩上で立胴構造のため、胴尻の腰撓部分で肩にくる重さを受けて、肩への負荷を減らすことになる。それに草摺は持ち上がってひらき、大腿部にまつわりにくくなる。肩先・腰の運動機能に配慮した当世具足の機能的構造です。その上に、上帯を締め刀を差すのです。そして草摺と袖の最下段の菱縫板は、畝目も菱縫も省略される。そのかわりに物にあたりやすい草摺の菱縫板には、熊毛をうえ、機能としては消音の効果と、全体の金小札に對し色彩効果を出しています。

六、当世具足で中世には無かった特徴として、肩上の襟まわりと同じく、防禦の完全を期して付属すべき「小具足」すなわち面頬、籠手、佩立（草摺りの間隙の防禦）、脛当を兜・鎧と、同時制作する点です。御嶽具足では面頬と脛当欠失。また袖と籠手を重ねて着装する構造で、胴の肩に、かつての中世の胴丸にはなかった籠手付の畏（責鞆）がつく。必ず籠手を付けるものだという構造を持つ点が重要な点です。御嶽具足の当世袖といふかさねる籠手になじむ湾曲をもつ袖と、籠手と袖が共に金箔で彩色されている点、同一意匠である点も注目

七、御嶽具足は板物ですが、漆下地を厚みのある本物の小札のように盛り上げ、黒漆に仕上げて金箔を彩色、本小札より精巧な仕立てです。本物の小札のような経年による不揃いもないので、綺麗に小札頭が揃っています。毛引威色は萌葱系統の啄木糸と、紫色と段々に威した安土・桃山期の金小札色、威胴丸の名品を連想させる美しさを持つ当世具足です。

五、草摺は御嶽具足にみる六間五段が多い。そして、軽い革板仕立という点が大切

六、当世具足で中世には無かった特徴として、肩上の襟まわりと同じく、防禦の完全を期して付属すべき「小具足」すなわち面頬、籠手、佩立（草摺りの間隙の防禦）、脛当を兜・鎧と、同時制作する点です。御嶽具足では面頬と脛当欠失。また袖と籠手を重ねて着装する構造で、胴の肩に、かつての中世の胴丸にはなかった籠手付の畏（責鞆）がつく。必ず籠手を付けるものだという構造を持つ点が重要な点です。御嶽具足の当世袖といふかさねる籠手になじむ湾曲をもつ袖と、籠手と袖が共に金箔で彩色されている点、同一意匠である点も注目

八、当世具足の部分は、角はみな丸味があります。籠手と袖の冠板、草摺の菱縫板、鉄具廻りの輪郭、鞆一段目小さな兜の吹返しみんな角が丸っこい。「小丸」仕立てです。兜の鞆は、日根野鞆、饅頭とならんで当世具足に多い「当世鞆」ですが、その菱縫板は軽やかに曲面を作って外に反り出し、下緑の輪郭は、肩の袖の冠板の山形を受けて浅くなだらかに判り込む「肩摺り」という線です。美しい機能美です。類似の輪郭は、兜の鉢の正中板の下縁のうねりの曲線にもあります。なお、鉢の左右の腰巻板には鉄の角元を打ち（馬手側欠失）、角を左右に立てていたのです。面や眉庇の裏が朱色塗りである点は当世具足の特徴です。

慶長末年代に定着した当世具足の基本的な様式を備えた御嶽の金小札段威二枚胴具足は、品格良い機能的な美しさでまとめ上げられています。しかし、多く目にする当世具足は年代の下つたもので、支配者となった武士が、その権威を具足に、行きすぎた装飾や、机上の空論による工作を取り付けて、武器としての評価に耐えないまま美意識の対象とはなり得ない存在になっ

私、この具足にその二領のうちにあふわしい制作・年代・品格があると思います。四十五年余の昔、私が師事した日本甲冑研究の大斗、山上八郎先生は、旧宝物殿でこの具足を前に、このような「当世具足」を「寛永具足」と呼ぶと年代評価なさっていました。その翌年、昭和五年（一九七六）十一月三日に、市文化財に指定されたのです。私はその後、山上先生の高弟、山岸素夫先生に師事し、同門であった甲冑師西岡文夫氏が今回、緒所など、考証正しく、近世前期の当世具足を眼前に鑑賞、理解でき形姿に修理された事を感慨深く思います。